

緒言

奥田 太郎

人は一人では生きられない。人間は社会的動物である。こうした常識に棹刺すように、21世紀も20年目を前にした世界の動向は、交雑を志向していたように思う。国境を跨いだ交流が推奨され、対話型の教育カリキュラムが導入され、街のあちこちに人々が憩えるフォーラム的な場が設けられ始めていた。人と人とが、よりいっそう近く膝を突き合わせ、時に口角泡を飛ばし合いながら、多種多様な仕方で混じり合うような社会へと歩みを進め、情報コミュニケーション技術（ICT）を用いつつも、人工知能（AI）には手の届かないようなクリエイティブな何かを生み出す、人間にしかもたせない文化を発展させる。そうした潮流が、突然、ほぼ全世界同時に途絶させられることになった。

2019年11月中旬に中国の武漢市で発生したとも言われる未知の新型コロナウイルス SARS-CoV-2が引き起こす感染症 COVID-19は、瞬く間に世界中に広がり、まさにパンデミックを引き起こした。様相が一変したのは、医療技術や衛生環境について世界各国の中でも高水準に安定していると思われていた欧米諸国で次々と、この未知の感染症の犠牲者が出始めた2020年の春先であった。英米の首脳が感染したというニュースは、まさに今自分の背後にまで災いが迫りつつあるイメージを生み出したであろうし、日本においては、著名な芸能人が感染しこの世を去ったというニュースが、人々の歩みを止めたと言えるだろう。飛沫感染という感染拡大経路が指摘されると、飲食店や文化施設など、人々が交雑する場は悉く閉じられることとなった。代わりに開かれたのは、オンラインを介したICTによるコミュニケーションの世界であった。働く大人たちの多くは、会社への通勤を禁じられて在宅で遠隔勤務をすることとなり、学校に通う子どもたちは皆、家に留まることを求められた。最も感染リスクの高い状況にあった病院には、数々の制約が設けられ、患者が通院するのもままならない状況となった。さらには、新生児の誕生と死者の弔いへの立ち合いが、感染リスクゆえに厳格に禁じられた。日々、テレビメディアに「専門家」と呼ばれる人々が現れては「新しい生活様式」を掲げて警句を発し、キャスターたちは、感染者数を毎日伝えることで、人々の行動制限を後押しした。外を出歩く人々は皆、マスクを着け、建物に入る際には体温を強制的に測定され、手指の消毒を求められた。拙速な買い占め行動のせいか、一時期、店頭からマスクが消えた。海外への渡航も、海外からの入国も、ともに厳しい制限下に置かれた。まるでこの世界には、新型コロナウイルス感

染症以外の病は存在しなくなった、とでもいうような息苦しい感覚が社会中に蔓延することになった。世界中の人たちが、同時多発的に「コロナ禍」という名の災害に見舞われたのである。

こうした動向にいち早く反応し、一般書から研究書まで、様々な「コロナ禍」関連図書が、かなり早い段階から書店に並んでいた。人類の歴史は感染症との闘いの歴史と言っても過言ではなく、新型コロナウイルスという未知のウイルスを前にしても、多くのことを語りうるだけの知的な蓄積が研究者たちの手元には十分に存在していたということであろう。そこに多くを付け足す必要はないのかもしれない。しかし、「コロナ禍」を体験し今を生きる研究者が、一通りの経験をした後、どのようにそのことを論ずるのか、その思考の痕跡をまとまった形で記しておくこと自体に意味があるのではないか。そのように考えて、本特集は企画された。

「コロナ禍」の渦中で、以前より伏在していた諸問題がより鮮明に姿を顕すことも少なくない。実際、本特集の論考群が扱っている問題、すなわち、フェイクニュース、炎上などの非-主体的な暴力、雑談の軽視、孤独は、周知の通り「コロナ禍」以前から存在し、論じられていたものである。しかし、重要なのは、それらの問題が今、どのような形で立ち現れており、それに対して今私たちがどのように考えるのか、である。これらの問題は、いずれも人と人とを遮断する事態と響き合って増幅されてきたものであり、今後、「コロナ禍」が過去のものとなっても、変わらず議論されていくものであろう。これまでも、そして、今まさに、さらにはこれからも、疎かにされがちなことについて、しっかりと考え論じていくことは、人文学・社会科学の研究に求められる大きな探究課題である。本特集に収められた論考はいずれも、明晰な筆致で核心に迫る、安全域から半歩踏み出したものばかりである。10年後、懐かしさをもって本特集を振り返った時、各論考はどのように読まれうるのか。そういったことも念頭に、読んでいただければ幸甚である。